The Japan Society of Educational Sociology

学歴の機能主義的解釈の批判的検討
ー戦前期女子高等教育学歴の地位表示機能に関する再検討ー

寺崎里水（お茶の水女子大学大学院）

1.はじめに

日本の高等教育機関の階層構造はいかに形成され、どんな機能を果たしてきたか。この問いに対して、特定の学校への職業上の特権賦与により学校の社会的威信の序列が形成されたとする従来の説明図式は、たぶんに技術機能主義的である。戦前期、教育資格を必要とする職業とは基本的に縁の薄かった女子がなぜ学歴を獲得しようとしたのか、学歴を持つことはどういうメリットをもたらしたのかについて、これまでの研究は十分に説明してきたとはいえない。本報告は、学歴エリートとの婚姻から戦前期の女子の学歴の機能を考察した天野マ（1987）の論稿を主たる対象として、その問題点を指摘し、新たな研究の方向性を示すことを目的とする。天野マの論稿を対象とするのは、学歴エリートの配偶者養成機関としての戦前期の女子中高等教育の機能を実証的に示し、かつ学校間の序列の存在を示唆した研究として高い評価を得ており、後の女子教育研究に大きな影響力を及ぼしたとされるからである。

2.「地位形成機能」と「地位表示機能」

教育の機能は「地位形成機能」と「地位表示機能」の２つに大別される。教育の「地位表示機能」は、学歴を象徴的に利用した「身分集団」の持つ独特の「身分文化」と学歴との関係を考察することを可能にし、象徴的な学歴の利用の仕方をする集団の１つとしての女子と学歴の関係を考察するのに適しているとされた（天野イ 1983）。問題は、学歴の「地位形成機能」に関する研究が、学歴が職業経歴にもたらすメリットから、高等教育機関の階層構造の形成過程とその機能を説明してこれたのに対して、「地位表示機能」に関する研究は、出身階層や配偶者の学歴（到達階層）に対応するかたちで学校序列の存在を示唆し、その機能を推測することしかできないという点にある。

地位形成のために利用される学歴に注目した研究では、それが社会的資源のセットである社会的地位、つまり職業と密接な関連を持っていたために、学歴を手に入れることのメリットや学校間の格差は可視的であった。しかし、学歴の象徴的な利用に関する研究では、学歴は特定の「身分文化」の所有を示すものであることが推定されるものの、それがどの程度「地位表示」的であるのか、については考えられてこなかった。天野マ（1987）の分析においても、学歴が「地位表示」的な機能を果たし、学校ごとにその機能に差があったことは示されているが、配偶者の学歴の差という形で間接的に確認されたにすぎない。配偶者の学歴から女子教育機関の序列を示唆することは、婚姻を前提にするという問題がある。女子教育機関の序列やその機能の差はどのようにして捉えられるのだろうか。

3.「学校文化」

天野マは、女子の学歴の実質をなす「学校文化」が、女子と象徴的な学歴の機能を考察するにあたって重要だと考えた。女子高等教育機関には「職業教育」を行う学校と「教養教育」を行う学校の２つのタイプがあり（国立教育研究所 1974:546)、「教養教育」を施す「名門」の学校は独特の「学校文化」を強調することによって特定の社会階層から学生を選抜し、「身分文化」を伝達していると説明される（天野マ 1987:88)。したがって、学校の序列は、学校の伝達する「身分文化」の違いに注目することで明らかになると考えられる。しかし、学校が学歴エリートの妻にふさわしい「身分文化」を伝達するという説明図式は、学校が学歴エリートの妻という職業にふさわしい職務遂行能力としての「身分文化」を伝達するという技術機能主義的枠組みを根底にもっている。そのことによって次の３つの重要な問題を論じなければならない。

まず、「身分文化」とは何かという問題があげられる。高等教育へ進学できる者が地理的に限られていたことに鑑みると、学校タイプが「職業教育」「教養教育」のどちらに分類されていようと、高等教育機関に在籍することが一定の社会階層への所属を示すことであり、在籍することによって伝達される「学校文化」はある種の「身分文化」だと考えられる。だとすれば、これまでの研究において、「職業教育」「教養教育」という分類が意味をもっていたということを再検討しな

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ければならない。天野[7]（1987）は個々の学校で社会階層と密接なつながりをもつ独自の「学校文化」があったことを重視し、その考察が今後重要であると指摘しているが、女子の学歴について、この後に続く研究は行われていない。

次に独特の「身分文化」をもつ「身分集団」をどう考えるかという問題があげられる。高等教育を最も有利に利用し得たのは旧士族層であったことが先行研究で明らかにされているが、旧士族層を排他的な「身分文化」をもつ「身分集団」と捉えてよいのだろうか。例えば園田は近代日本の出発点において、士族は自ら身分閉鎖的な階層秩序を撤廃し、特定の身分や階級が支配権を握ったことは一度もなかったと述べている（園田 1983:56）。仮に「身分集団」と捉えたにしても、士族層の教育機関への接近性の高さは士族層の学問と近代的職業への親和性によって説明されるだけで、「学校文化」と「身分文化」との関係については考察されていない。まして、特定の社会階層の女子と教育、「身分文化」と「学校文化」との関係は問題化されてこなかったといってよい。

最後に、「学校文化」はどのように「身分文化」として伝達されていたのかというメカニズムの問題があげられる。与えられる学校教育が自動的に内面化されたかのような教育像を描くことの問題については廣田（1995）によって既に指摘されている。このことは、女子教育機関は出身階層と到達階層とを媒介する単なる乗り物に過ぎなかったのか、それとも、何らかの加工を施して新たな「身分文化」をもつ社会階層を創り出す役目を担ったのか、という女子教育機関の機能に関する重大な問題を含んでいる。さらに、前に述べた「職業教育」「教養教育」という学校分類を再検討するという課題とも重なり、顕在的・潜在的な面を含めた「学校文化」をどのように定義し、どう捉えるのかという問題でもある。

4.新たな方向性

獲得した学歴、あるいは身につけた「学校文化」がどの程度「地位表示」的であったのかという問題について、学歴を得た者のみに注目し、結果として彼女たちがどのようなライフコースを歩んだのかを問うこと、それによって学校格差を見出そうとすることは有効ではない。学歴が結果的にどのような機能を果たしたのか、という観点を脱し、「学校文化」と「身分文化」に関する上記の問題を、１つ１つ重要な課題として考察する必要がある。

本報告では、「学校文化」と「身分文化」との関係を重視して、結果的に学歴がどう利用されたかという視点から、当事者が学歴をどう捉えていたのかという視点への転換と、高等教育機関や学歴を得た者が当時の社会のなかでどういう存在だったのかを問うことを、今後の新たな研究の方向性として示そう。

高等教育を享受する者がごくわずかだった時代に、女子高等教育機関は良くも悪くも注目の的だった。伝達される情報そのものが社会的地位を表示し、ある層にとっては進学しない理由となり、ある層にとっては進学理由になったといえる。このことは「学校文化」がどのように伝達され、どのように「身分文化」として機能するかという問題と無関係ではない。本報告では仮説的にしか示すことができないが、高等教育に在学する者は与えられる「学校文化」に積極的にコミットし、卒業後もその学校卒業者としての誇りを高く持ち、それにふさわしいように振る舞う傾向がある。つまり、学歴を得た者はそうでない者との差異化をそれによってはかったと考えられるのである。学歴が「地位表示機能」を果たすとは、特定の学歴によって括られる集団が他との差異を見出し、また他からも見出されることといえよう。その差異を誰がどう評価するかによって女子教育機関の序列は異なってくる。したがって、当時の社会における女子教育観や学校の位置づけを考察する必要が生じるのである。

学歴について、学校や学歴を獲得した本人だけに注目するのではなく、学歴を持たない者や学校をとりまく社会との関わりのなかでその意味を考察することは、これまで学歴主義の浸透といわれてきたものが何だったのかを改めて問い返すことでもあり、本研究が単に女子の学歴研究にとどまらないものであることを付け加える。

【参考文献】

天野郁夫　1983　「教育の地位表示機能について」『教育社会学研究第 38 集』40-49 ﾟｰ
天野正子　1987　「婚姻における女性の学歴と社会階層－戦前期日本の場合－」『教育社会学研究第 42 集』70-91 ﾟｰ
廣田照幸　1997　『陸軍将校の教育社会史』世織書房
国立教育研究所　1974　『日本近代教育百年史第５巻学校教育３』教育研究振興会
園田英弘　1983　「学歴社会－その日本的特質」『教育社会学研究第 38 集』50-58 ﾟｰ

NII-Electronic Library Service